2024年2月4日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

逃げない羊飼い

［ヨハネによる福音書10章7～18節］

イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い、また追い散らす。――彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

[1]　私たちは、「羊」

「あなたは何の動物に憧れますか」或いは「もしなれたとして何になりたいと思いますか？」と聞かれて「羊になりたい」という人は多分そう多くはいないのではないかと思います。ライオンとかチーターとか、鷲とか、そのような動物がいいなあと思う人はいらっしゃるかもしれません。何か強そうで堂々として。ででも「羊」はどうでしょうか。決して強い動物、その姿に憧れるような動物ではありませんね。けれども、信仰の世界では、私たち自身のことを「羊」になぞらえて言うことが少なくないと思います。ただその場合、なぜ「羊」なのかと言うなら、それは「羊飼い」という存在があってこそです。羊飼いという存在のもとで、羊は、愛され、養われるのです。平安を得るのです。羊自体は、迷子になりやすく、逞しくもなく、またとても近眼な動物だと聞いたこともあります。“迷子になりやすく、逞しくもなく、近眼な動物”。―私たち人間のことですよね。羊以上に人間のことを的確になぞらえることが出来る動物は多分ありません。そして、イエス様は私たちに対してこう言って下さったのです。―「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」（14節）。単に羊が羊飼いの保護のもとにあるということだけではなく、殆ど一心同体と言ったら良いでしょうか。「（主イエス様は）自分の羊を知っている」。私たちは、自分でも自分のことが分らなくなることがあると思います。自分に絶望することがあると思います。けれども「わたしは自分の羊を知っている」と言って下さるお方がいて下さる！まことの羊飼いである方主イエスは、私たち以上に私のことを知っておられる！こんなに嬉しいことはありません。

[2] 「雇い人」ではなく、「羊飼い」であるイエス

今日の聖書箇所を読んで気が付くことは、イエス様が「わたしは良い羊飼いである」と言われた時、それを「雇い人」との対比で言われているということです。12節。「羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると羊を置き去りにして逃げる」。「雇い人」というのは文字通り“雇われた人”です。羊のことを気にはかけるけれども、それは雇い主からの見返りがある仕事としてです。特に問題がなければ淡々と仕事をすればそれで良い。誰も文句は言えない。けれども、狼が襲って来るような一番危機の時に、この雇い人は、羊を置き去りにして自分は逃げて行ってしまうと言うのです。ですからイエス様は、ハッキリ言っておられます。「彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである」と。まあ、本当の意味で羊を愛していない、ということが露呈してしまっているのですね。

それに対して、イエス様はご自分のことを何と言われたでしょうか？私たちはこの言葉に驚かざるを得ません。―11節。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」。こんな羊飼いがいるでしょうか？「羊のために命を捨てる」？あり得ないことです。羊飼いが死んでしまったら羊はそれこそ困ってしまうではないですかと言いたくなります。しかし、イエス様がおっしゃっていることは、そんなようなことではなく、愛というのは、本当の愛というのは、愛される相手が本当に生きること、命を得ること、そしてそのためであるならば、わたしは自分の最も大切なものも献げるのだと、そういうことをおっしゃっているのだと思います。これは、私たちが聖書に聞かなければ知らなかった愛です。神の愛、主の十字架の愛です。イエス様は自ら進んでご自分の命を、私たちがそれこそ“狼”ならぬサタンに連れ去られ、その虜に陥らないように、身を張って戦って下さり、また、身代わりとなって下さったのです。私たちのために。

 今日は、主の晩餐式も執り行いますが、イエス様は、聖書が示す最後の晩餐が終わった時も、このあと祭司長たちや兵士らがご自分を捕らえるため、その手伝い（つまり裏切り）をしようと、闇に消えて行こうとする弟子ユダに、「しようしていることを、今すぐ、しなさい」（ヨハネ13:27）とおっしゃいました。イエス様は、この時逃げようと思えば逃げられた筈です。しかし主は、人の心も、その罪も全部知り尽くされたうえで、逃げることはなさいません。「雇い人は、狼が来るのを見ると羊を置き去りにして逃げ去り」ますけれども、主は逃げません。「羊のことを気にかけて」いるからです！自分の命より、羊のことを思っている羊飼いなのです。

　しかしなぜそこまで「気にかけて」下さっているのでしょうか？それは、彼が父なる神様から委ねられた「定め」のためです。主イエス様はその「定め」や「使命」を父なる神様から与り、それを成し遂げるためにこの世に来て下さったのです。16節にこうあります。「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」 イエス様の心が向かっているのは、「すべての羊」です！神様の救いの歴史はユダヤ人を敢えて選ばれたという所から始まったということも出来ますが、それは皮切りに過ぎないんです。イエス様の思いは、全ての民、全ての民族を気にかけています。「（わたしは）その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして羊は…一つの群れとなる」とおっしゃっている通りです。私たちは、神の国に迎えられた時、そこには民族の違いはない筈です。神の国に国境は絶対ありません。また、教派教団の区別もないと思います。「自分などは神の国に迎えられるはずがない」と思う必要もありません。それはイエス様の思いではありません。イエス様の心は、また、神様からの「定め」は、誰もが神様の愛の中にある、「一人の羊飼い、一つの群れ」を実現することなのです！

　今私はイエス様の「定め」という言葉を使いましたけれども、この新共同訳では「掟」となっていますね。18節で「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」口語訳では「定め」。主は、十字架で身を献げることも何もかも、それを父なる神様のみ心から聴き、それに従うというその驚くべき一体性の中で、そのご生涯を生き抜かれたのです。その意味で、「掟」と言うより「定め」を生きられたと言って良いように思います。そして、そこにはものすごく大きな父なる神様への信頼がありました。17節以下。「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。」…私は、今回これを本当に有難い感謝の気持ちで受け取りました。「わたしは自分でそれを捨てる」。わたしにはそれをすることが許されている、ということでしょう。他の誰にも出来ないことですし、人間がそれをしても、私たちの罪はそのまま残ってしまうのです。しかし、神の御子がまことの羊飼いとなってこんな愚かで罪深い羊である私たちのために自ら進んでその命を捨て、贖いのわざを成し遂げて下さいました。「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。」―主は父なる神から命を再び受けることも出来るとおっしゃいました。これは凄いことですね。そしてこれは輪廻思想ではなく、全く新しい復活の命のことだと思います。私たちにも復活の命を与えるため、主が先んじてご自分の命を投げ出して下さったということではないでしょうか？こんな羊思いの羊飼いが他のどこにいるでしょうか!?

[3] 私の名を呼んで下さる羊飼いの声を聞いてついて行こう！

 ご自分の身をもって、いや、その身を献げ切り、愛する者からもののしられ、苦しみの極みも経験されながら、愚かな羊である私たちを救い出して下さったイエス様。イエス様は、私たちを捨てず、本気の愛で私たちを愛して下さっています。ですから私たちも、その主に本気でお応えして行きたいと願うのです。

もしかしたら、私たちの方が逆にイエス様のことをまるで雇い主が使うように都合よく捉えてはいないでしょうか。私はイエス様がおっしゃったこの「雇い人」という言葉にドキッとさせられました。私の方が、神様、イエス様を雇い人のようにして、そこまでやってくれればいいよと、あとはもう自分でやるから…などとどこかで思ってはいないか。そんな関係は、イエス様悲しまれるでしょう。そうではなくて、本当にイエス様と命の結びつきをして行きたい。10章3-4節でイエス様はこんな言葉を語って下さいました。―「門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのでついて行く。」―羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出して下さる。羊もまたその声を知っていると言うのです。私たちもまたイエス様に呼ばれています。私がどんな人間か知り尽くされた上で、個人的に親しく名を呼んで下さっているのです！私たちの人生にはこの主イエスというまことの羊飼いがいて下さる。何と幸いなことでしょうか。

さあ、このお方の声を聞き、ついてゆきましょう！その終着点は、天上の緑のまきば、決して消えることのない、復活の命の喜びです。お祈り致します。

私たちを愛し抜いて下さる主なる神様、あなたはまことの羊飼いです。ですから、私たちは自分の弱さも愚かさも、皆あなたにお預けすることが出来ます。この人生の全てを委ねることが出来ます。感謝します！どうか深くあなたの愛を悟らせて下さい。あなたを都合よく扱ってしまうようなまことに罪深い者ですが、そんな者のためにあなたはご自分の命を献げて下さったその事実をいつも忘れることがありませんように。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。